

人生を変えた1冊

2021年7月27日

ZOOMオンライン取材

人生を変えたネット記事というのはなかなかないです。
人生を変えるのはやはり本です。



本と偶然性

伊藤亜紗先生

プロフィール

東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長、リベラルアーツ研究教育院教授。MIT客員研究員（2019）。専門は美学、現代アート。

もともと生物学者を目指していたが、大学3年次より文転。2010年に東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美学芸術学専門分野博士課程を単位取得のうえ退学。同年、博士号を取得（文学）。

主な著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社）、『どもる体』（医学書院）、『記憶する体』（春秋社）、『手の倫理』（講談社）。

WIRED Audi INNOVATION AWARD 2017、第13回（池田晶子記念）わたくし、つまりNobody賞受賞。第42回サントリー学芸賞受賞。



インタビューア：図書館サポーター黒丸 愛美（環境・社会理工学院 社会・人間科学系 D1）
（&記事作成） 図書館サポーターJIN WEN（環境・社会理工学院 社会・人間科学系 M1）
図書館サポーター川橋 星奈（情報理工学院 情報工学系 B2）
編 集：図書館サポーターJIN WEN（環境・社会理工学院 社会・人間科学系 M1）

本は偶然性を開くことができます。

Q：先生が現在取り組んでいる研究をお聞かせください。

A：私の専門は「美学」という、哲学の兄弟のような学問です。哲学は「時間とは何か」「存在とは何か」のように言葉で言い表された概念を扱いますが、美学はむしろ言葉では簡単に言葉で言い表せないものをあつかいます。具体的には、人間の感性や感情、身体感覚、そして芸術作品などです。私は講義では芸術を教えています、研究では「人間の体」をテーマにしています。

美学という学問は西洋が発祥で、250年位の歴史を持っていますが、その担い手のほとんどが白人男性であったため、たとえば出産の問題が扱われていないなど、学問自体の視点が偏っています。彼らが感性、または身体について語っていることを東洋生まれの女性に当てはめてみると、リアリティがないことが多いのです。これまでの美学には、本当の意味で自分が感じることにリンクしていない部分が多くあるのではないかと考えています。そこで、これまで研究対象になってこなかった様々な人々の持つ感性について扱うことで、より現実味のある「美学」になるようにという考えから、障害を持っている人の感性などにフォーカスするに至りました。

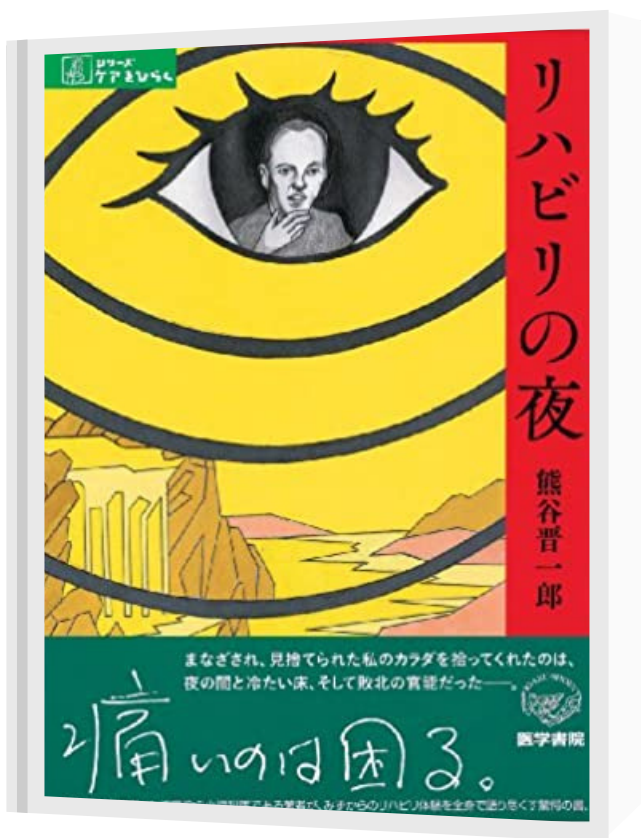
Q：人生を変えた1冊である「リハビリの夜」について教えていただけますでしょうか。

A：著者は熊谷晋一郎さんという方です。現在は東大の先生で、医者であると同時に、脳性麻痺の当事者でもあります。

この本は熊谷さんが自身の体について、リハビリ療法や人間関係なども踏まえながら赤裸々に語った本です。彼は、当時の医療に従い幼少期からリハビリを1日3時間ほど、18歳になるまで受けていました。麻痺であまり伸びない手を無理やり引っ張られて痛かったと書かれています。しかし、最近の医学研究では、彼の脳性麻痺にはリハビリの効果が大きく見込めないことが明らかになっています。この本には、リハビリに対する考え方が今と全く違った時代に生きた筆者の目線から、効果が出ると信じて無理に体を動かすリハビリや学校での同級生との交流など、多くの経験談が組み込まれています。

私は、自分の体についてこんなに赤裸々に語って良いのだということにショックを受けました。哲学や美学は「一般的」とされている身体について語りがちです、先ほど美学の話をしました、この学問では、西洋の男性が本当はヨーロッパ人男性のことしか視野に入れていないのに、さもそれが普遍的人間の体全体に当てはまることだ、人間とはこういうものだ、と一般化して語っていたことがあるのです。熊谷さんの本はその常識を覆し、自分自身を例とした個別の体について圧倒的な表現力で語っています。当時の私は、個別のことを学問として取り上げて良いのだと知って衝撃を受けました。

この本は彼の実体験を基に彼自身にフォーカスしているので小説のように読むことができます。自分の体と違う体の話なのですが、自分自身にも重ね合わせることが出来る部分、思い当たる節が多くありました。



Q：『リハビリの夜』との出会いはいつ頃でしょうか。

A：東工大に着任したのが2013年なので、そのくらいの時期だったと思います。私は高校生の頃まで全く本を読まない子供でしたから、「人生を変えた1冊」に出会ったのは大人になってからでした。本を読む代わりに夢中になっていたのは、生物観察でしたね。特に昆虫やタコなど、独自の世界を持っているような生物が好きでした。

Q：最初は生物学を大学で勉強なさっていたとのことですが、どのようにして現在の研究分野に至ったのでしょうか。

A：大学に入った時は生物学を勉強しようと意気込んでいたのですが、しばらくして大学の扱う「生物学」と自分の学びたかったことに対して乖離を感じるようになりました。私が大学に入った頃には研究が情報化しており、DNAを読めば生命のすべてがわかるという考えが一般的でした。そこで、自分が考えたい「生命とは何か」「昆虫とは何か」「自分が他の生物になった時に世界はどう見えているのか」のように生物について考えるには、文系分野にいったほうがいいのではないかと考えたのです。

大学二年生と三年生の間の休学期間に、専門を変えることを決めました。文系科目の勉強をしなければと思ったのですが、せっかくなら休学期間にやりたいことをしようと考えて、パリに職人修行に行ったことがあります。今のキャリアと関係があまりないのですが、仕事の合間に美術作品の鑑賞ができましたし、時間がたくさんあったので勉強もできました。実は、渋谷のBunkamuraで行われていたオートクチュールの展示会に感銘を受けて、オートクチュールの刺繍職人に対して興味が湧いて、勢いでパリに渡ったんです。

当時はインターネットこそ存在していたものの、わからないことがあったら検索するという習慣はない時代でした。だからこそ、現在ではネットで調べて「危ないかな」「将来につながるかな」などとたくさん考えて行かないような場所にも、興味があるという理由だけで当時は飛び込んでいけたのだと思います。突拍子もないチャレンジができたという意味では、若者にとっては当時のほうがめぐまれていたのかもしれない。

Q：伊藤先生が授業を行うにあたり心掛けていることは何ですか？

A：教育というものは「生もの」で、ライブの一つであると考えています。教員のちょっとした一言はクラスの雰囲気を変えますし、全く同じ授業をすることは二度とできないと思っています。

気を付けていることは、学生を武装解除させることです。私は特に「感じる力」を育てる授業を行っていますが、芸術作品を鑑賞するときに、学生はどうしても正解を言わないと教員に怒られてしまうのではと思って武装してしまいます。人は武装していると、緊張してしまって素直に何かを感じることはできません。武装を解除させて自分の意見を率直に述べてほしいです。間違ったことを言っても大丈夫だという雰囲気を作って、そこから成長するプロセスをちゃんと踏めるように気をつけています。

—記事を読んだ人へのメッセージをお願いします！

今はネットに沢山の情報があり、本はオールドメディアになっていますが、私は本に可能性を見出しています。私自身、ネットの記事を書くよりも本を書く方が何百倍も楽しくて、書きがいがあります。

本は基本的に孤独に1人で読みますが、読み手の経験を照らし合わせて読みますよね。読んだ人の数だけ解釈があって、自分が思いも経験とミックスされた多様な感じたような芽がいっぱい出るのみ手と書き手の繋がりが出来て、はないですが、本を通して解釈うにして、人間関係が繋がってと思っています。



よらなかった感想や、読み手の想が現れます。想像していなかつた中で目に見えない読決して明確な仲間になるわけでの偶然性が開かれます。このよ作られていく可能性が本にはあ

ネット記事は、すれ違いが起こると問題になるので、解釈の偶然性が起こらないように編集者が気を付けて書きます。内容も非常にコンサバティブです。でも本はそれを通して偶然性を開くことができますし、本だから書けることを書いていると感じます。どんなに情報化が進んでも本を読む意義があります。

人生を変えたネット記事というのはなかなかないですよ。人生を変えるのはやはり本です。